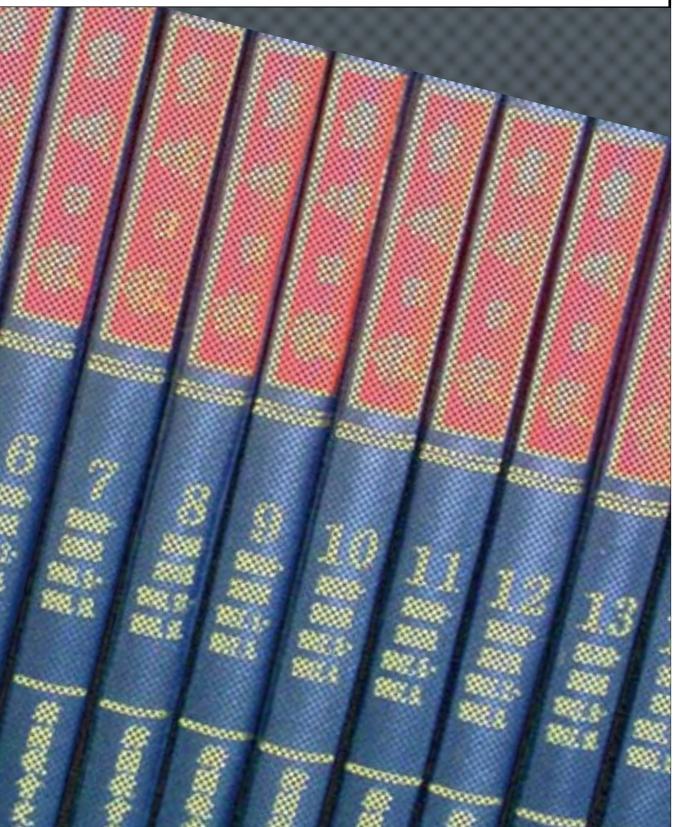


## Contents

- |   |   |       |
|---|---|-------|
|  | 金田 章裕<br>デジタル・ヒューマニティーズ<br>との関わり        | 2     |
|  | 楠井 清文<br>「外地」日本語文学研究とデジタル・<br>ヒューマニティーズ | 3     |
|   |   | 行事の記録 |



# デジタル・ヒューマニティーズ との関わり



金田 章裕（立命館大学衣笠総合研究機構・教授 / 「歴史地理情報研究班」）

デジタル・ヒューマニティーズを、人文学的知識の、電子媒体を使用した検索・分析・統合・発表などの総体とすれば、私の関わりは全く初步的な段階にとどまっている。ただ、それが今や、人文学研究者にとっても基本ツールとなっていることは事実である。

さらに教育レベル、あるいは研究者養成レベルを考えた場合、その有用性、利便性は一層高まる。人文学の研究あるいは研究者養成にとって重要なことの一つは、事実の確認あるいは追体験であり、デジタル技術が、具体的な事象の再現性にすぐれた機能を有していることも論を待たない。再現性には様々な側面があるが、例えば私自身が資料として使用することの多い古地図をとりあげるとすれば次のようにある。

古地図と総称されるものには手描きのものも印刷（多くは木版印刷）されたものもあるが、前者であれば一つ一つの古地図が唯一の存在であり、後者でも数少ないか、事実上唯一のものもある。つまり、貴重性が高く、かつ保存・利用に極めて注意を要する資料である。

古地図は又、一枚刷のものが多いが巨大なものから小さなものまであり、軸装として保存したり、折本として出版されていたりと、形状も多様である。

これらの特性、つまり貴重かつ脆弱な資料である上に、形状が多様で取り扱いに不便をきたす場合が多いので、閲覧に際してはさまざまな制限を設けるを得ないのが実情である。

ところが、一旦デジタル化されれば、これらの不都合はほとんど解消する。とりわけすぐれた再現性は、研究はもとより特に教育において大きな効力を発揮することとなる。デジタル技術の有用性は論を待たないと言ってよい。デジタル化によって、実物以上に細部の詳細な検討が可能な場合も多い。

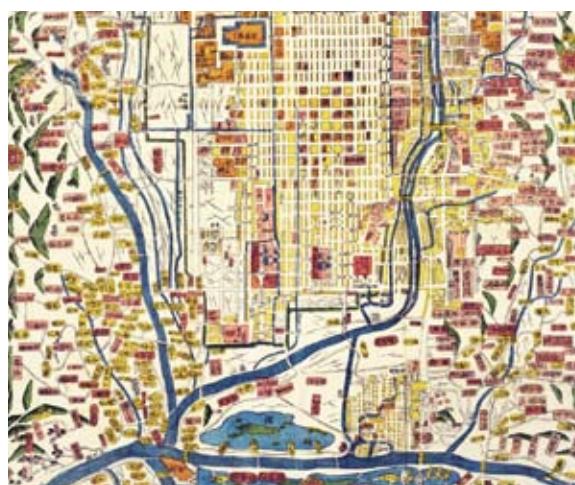
それでは、デジタル化されればそれで十分であるのかと言えば、必ずしもそうではない。例えば、古地図の有する全体としての印象や、布や紙などの材質など、本来の表現体総体としての作者・利用者の意図・認識を過不足なく理解・分析することの重要性については実物に戻らざるを得ないであろう。

利便性・有用性を十分に認識しつつ、実物に立脚しようとする私の姿勢は、旧弊の一語の下に片付けられそうではある。にもかかわらず、この姿勢にこだわらざるを得ないと思っている。

（金田・章裕 人文地理学）



参考図版1「京都明細図」[部分] (藤井永錦文庫所蔵、eik8-1-05)



参考図版2「文久改正 / 新選京絵図」[部分]  
(アート・リサーチセンター所蔵、arcBK09-0011)

# 「外地」日本語文学研究と デジタル・ヒューマニティーズ



楠井清文（本拠点PD／「日本文化研究班」）

きむらかずあき  
日本文化研究班・木村一信研究室では、「外地」の日本語文学研究をテーマに、資料のデータベース化・デジタルアーカイブ化に取り組んでいる。「日本語文学」とは「日本語で書かれた文学作品」を示す広い意味を持つ言葉である。そこには日本以外の地域で書かれたり、日本語を母語としない人々による文学を研究対象とする意図が込められている。従来の日本近代文学研究では、国内の日本人作家による作品が中心に取り上げられてきた。しかし戦前期から日本以外の地域、日本人以外の作者によって日本語の文学作品は書かれており、それが「外地」と呼ばれる地域だった。

「外地」とは主に日本の植民地や占領地に対して使われた名称であり、具体的には台湾・朝鮮・満州・南洋群島などを指す。これらの地域は、日本固有の領域であると定められた「内地」との政治的・社会的関係の中で常に下位に置かれており、文化的にも劣るものとされた。しかし実際には多くの日本人が移住し独自の文化を作り上げた。文学の領域では日本語を用いながら、現地の風物や慣習など「内地」の文学にはない主題が取り上げられた。一方で日本語や日本文化が、現地の人々にどのように受容されたかも重要な問題である。1930年代のソウルでは、日本風のカフェや流行歌などの日本文化が「モダン」の象徴として都市知識人層に流行した。30年代後半から40年代の戦時期になると、「外地」では現地語による発表が困難になり、創作には日本語を用いる他なくなった。当時の作品を理解するには、時代背景や作者の立場に応じて個別に検討していくなければならない。

「外地」の日本語文学研究は、単に文学史の空白を埋めるばかりでなく、異文化間の越境・伝播・表象という文化史的にも重要な問題を提起している。しかし90年代に復刻出版が本格化するまで、作品自体に触れることが困難だった。これは「外地」で刊行

された出版物の多くが散逸したためである。また作品の社会背景や文化状況も国内に比べて再現が難しい。このような問題点を解消するために、デジタル技術を応用することが本研究室の目的である。現在では「朝鮮」の日本語文学を研究テーマに、①『京城日報』文芸記事索引データベース・②文学雑誌リスト、の二つのプロジェクトを進めている。①は日本語新聞の文学・文化に関する記事を収集したものであり、小説・詩歌・演劇・映画・出版広告など、「外地」での多岐に涉る文化動向の資料として価値を持つ。また②は「朝鮮」で刊行された日本語文学雑誌の目録化であり、そこから可能な資料をアーカイブ化して行きたい。

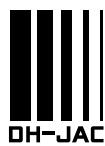
デジタル化の利点は、研究成果や資料を公開し、それが容易に閲覧可能となることである。これは国際的な研究の共同態勢を進める上で重要である。元来「外地」が複数の言語が用いられる場であり、各地域の文学研究者と共同研究を行う必要があった。同一の資料に基づき、各地域の研究者がそれぞれの専門的な知見を交換するような態勢を、Web 上に構築することが今後求められる。

(くすい・きよふみ 日本近代文学)

図1 宮城日報DB テキ画面



# 行事の記録



## GCOE セミナーの記録

会場：【衣笠】立命館大学アート・リサーチセンター 【BKC】立命館大学情報理工学部メディア情報学科会議室他  
※所属未記載は本拠点研究メンバーです。

- 第15回 4月8日（火）  
Dr Ellis Tinios（英・リーズ大学）「絵本のディアスボラ 海を渡った江戸絵本、1830-2008」
- 第16回 4月15日（火）  
赤間亮+古川耕平「海外におけるデジタル・ヒューマニティーズの動向」
- 番外編 ランチタイム・セミナー 4月22日（火） 10:40～11:40  
Dr Chun-Yang Chen（台湾・中央研究員資訊科学研究所） "How to get published by playing games?"
- 第17回 4月22日（火）  
源城政好+金子貴昭「藤井永観文庫の紹介とデジタル・アーカイブの報告」
- 第18回 5月13日（火）  
上田学+大矢敦子「大正期京都の映画興行研究 ー映画プログラムデータベースの活用と展望ー」
- 第19回 5月20日（火）  
岡本隆明「古文書・典籍を対象とした文字管理システムの紹介と今後の計画」  
稻葉光行+斎藤進也「地域を知を集めること協調的ナラティヴの蓄積による日本文化アーカイブの構築」
- 第20回 5月27日（火）  
花田卓司「京都における南北朝期の合戦」  
楠井清文「外地日本語文学雑誌データベースについて」
- 第21回 6月3日（火）  
Dr Ian Gregory（英・ランカスター大学）「GISを使って、時空間を理解するーデジタル・ヒューマニティーズの場合ー」
- 第22回 6月10日（火）  
崔雄「モーションキャプチャと生体情報の同時計測による舞踊動作の定量化」  
王曉光「デジタル・ヒューマニティーズにおける社会ネットワーク分析とその応用 ー学術ブログ・コミュニティにおけるインフォーマルなコミュニケーションの分析」
- 第23回 6月17日（火）  
尹新「板木の仮想印刷と表現」
- 番外編 ランチタイム・セミナー 6月24日（火） 11:00～12:00  
Dr Ken Coates（カナダ・ウォータールー大学）「デジタルの深層：デジタル革命における人文学の役割」
- 第24回 6月24日（火）  
鄭銀珍「乾山焼研究と資料のデータベース化」  
木立雅朗「友禅染と西陣織の図案」

イベント、GCOE セミナーの最新情報は下記のサイトをご覧ください。

立命館大学・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 HP [http://www.ritsumei.jp/humanities/index\\_j.html](http://www.ritsumei.jp/humanities/index_j.html)  
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/>

立命館大学アート・リサーチセンター HP <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/>  
GCOE セミナー・告知ブログ <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/seminar/>

文部科学省グローバル COE プログラム  
「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」  
News Letter 第3号  
2008年6月30日発行

立命館大学アート・リサーチセンター  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
TEL:075-466-3411  
FAX:075-466-3415  
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/>

お問い合わせ  
立命館大学研究部人文社会リサーチオフィス GCOE 事務局  
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
TEL:075-466-3335  
FAX:075-465-8245  
E-mail:jdh-jimu@st.ritsumei.ac.jp

